



浅井 信雄 教授

△特集▽神戸発情報論／浅井信雄対談シリーズ△1▽

# 神戸を知的産業の基地に

三木 康弘

神戸新聞論設委員長

浅井 信雄

神戸外国語大学教授

★神戸の視点で東京の情報カバ―は？

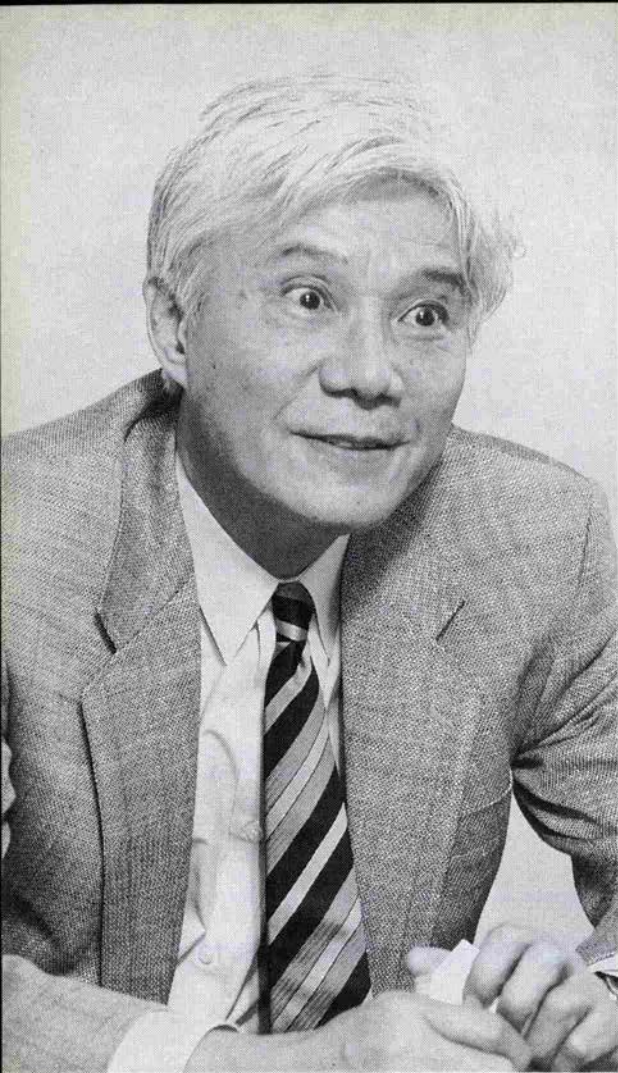
浅井 今日の情報ということについて、三木さんをゲストにお話をすすめていきたいと思っています。

東京は何でも一局集中ですね。政治から経済からマスコミまで東京に集中しています。地方の情報については東京にいるとほとんど判らない。まあマスコミの特徴というのでしょうか。そして地方へ来ると、今度は地方のニュースがやたらと多くて……。神戸新聞さんは、いわゆる中央―東京のニュースと地方のニュースを、どういうバランスで編集、報道されているのですか。

三木 神戸新聞は地方版が多い新聞なんです。地域面、県面、市の面などがあって、それも阪神版・神戸版・丹波版・西播版などに分かれています。

一応地方新聞ですから、それに力を入れるというのが当然で。ただ伝統面に神戸新聞のキャッチフレーズとして、郷土の全国紙版ということで打出しています。

共同通信のニュースが中央から入って来るのとのバランスということですが、これがむづかしいことです。読者の意識というのが、もう全世界的な範囲に広がっていますから、単なるローカルということでは、満足されま



三木 康弘 氏

せん。

ぼくは個人的に、ローカルな出来事を取材しても、それが世界の動きとどう関連しているかという所まで意識して取り上げたいと思っています。

浅井 私は学生に論文を書かせる時、国際関係学科ですから、国際政治をテーマにするのが原則ですが、その場合、必ずしも大風呂敷を広げる必要はないんだとしているのです。神戸にも色んな出来事がある。外国人労働者問題とかインド人の社会問題とか韓国人の社会問題とか。そこに注目して深めていけば……という考えです。三木 そうですよ。その目で見ると問題はたくさんありますね。

浅井 神戸には国際関係の論文のタネがたくさんあるという事です。言い方を変えると神戸の問題を考えるとき、世界のことを頭において考えるという……。世界と地域とのかかわり合いを意識して、常に紙面づくりの上でやっていけば、素晴らしいことになると思います。でも、言うは易しでねこれは……(笑)。

三木 たしかにその通りで(笑)。いま新聞記者は忙しすぎるといわれていますが、もうちょっと、例えば夕刊を廃止して時間を作ればなと思います。

浅井 これは地方新聞共通の問題ですね。夕刊はもういらないうちやないかと言われますが、神戸新聞でもそんな議論が出るんですか。

三木 いや、外部からの声ですよ。夕刊はテレビニュースでカバーできるし、一つには資源の節約ということですよ。

浅井 さっきの話の続きですが、ローカルニュースと世界とのかかわりのほかに、ローカルと中央(東京)とのかかわりもありますね。中央の情報はほとんど共同通信からのものを神戸新聞がもらって紙面に乗せているのですか？

三木 そうです。

浅井 その場合、共同通信の視点というのは東京の視点になっていると思いますが、神戸の視点から東京の情報をカバーするようなことは？





三木 氏

三木 こちらからねらいをつけられ、東京支社の編集も独自のニュースとして取上げてやっていますが、全体としてはまだ……。

浅井 東京支社の人的量的なこともあるでしょうが、意識して拡充しなければということなのか。いや今でもう充分だということなのか。

三木 気持ちとしては充分持っているのですが、仕方ない面もありますね。

浅井 私がこんなことを言うきっかけは、一つは選挙のたびに住民の意識関心が強くなってきて、自分達を選んだ人が東京で何をしているんだらうと。もっともっとそのへんの情報があってもいいんじゃないかと。でも、これは共同通信にまかせておけないことですね。

三木 それはかなりフォローしてますよ。出身議員の動向などは東京のスタッフの方で……。

浅井 東京では例えば総理大臣や野党党首の動向など、かなりくわしく書いてある。ところが兵庫県選出のことは、よほどのことがないかぎり、例えば大臣にでもなったときのほか、ふだん何をしているんだらうということ

は全くわからない。

三木 そう、少ないですね。

浅井 地元から出ていった議員は、いわゆる選挙民を代表して行っているんですから、いったい何をしているか情報を伝えてほしいですよ。税金で活動が支えられているんですからね。

三木 なにもしてないことも、一つの情報ですしね(笑)。

浅井 そうそう(笑)。有権者には大変な参考資料ですものね(笑)。

# ★地元政治家の情報を――

三木 ローカルの通弊かもしれませんが、なにか地元のことを出すのに、れるという姿勢があるのですよ。自社主催の行事についてはちよつと控えめにするとか、神戸出身で全国的にやっている人のことも、ちよつと遠慮ぎみに……とか。こので、れ方は我が社独特のものかも。

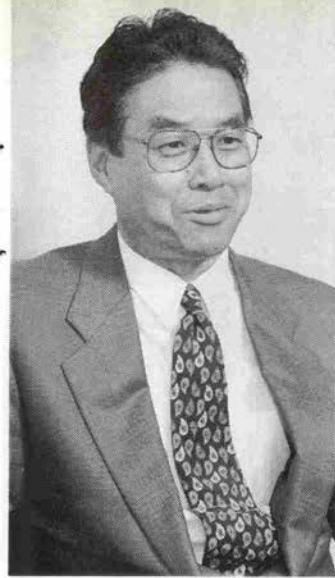
浅井 なにか宣伝めいて……ということからのご配慮と思いますが、政治家の場合は違いますよ。というのは次の選挙の時の判断材料になる情報ですからね。いいにしろ悪いにしろ全部知りたい。これをやるのは新聞社しかないですよ。

三木 ご意見を編集の方へ伝えます。

浅井 地元から大臣がでた時は、いろいろ気を使って書かれますが、これも地元の利益についてやってくれるのではないかという願望が見えるようで。つまり「大臣おめでとうございます」ということで、さあいいよ地元利益のために働いてくれるぞという利益誘導の先導役をやっているのではないかと思いますが……。

三木 むしろ日常の政治活動を取材するほうが大事だということですね。我々記者共通かもしれませんが、政治記事などは55年体制で報道姿勢がもたれている。連立時代の報道のやり方というのがまだ身についていないようなんです。

例えば今の政局の動きとか政党の動きとかばかりを追



浅井 教授

っていますが、ただこんなことでいいのか？という気持ちがあります。政治・政策がどうなっているのか？

浅井 これはもう全国紙共通の問題ですね。取材記者の意識の転換が充分でない気がしますね。ですから記者の書き方にしろ政治情勢の動きの予測にしても、昔と同じ視点で予測しようとするからですよ。自民党一党支配ではなくなっているのですから、いろんな前例のないことが起り得ることを前提に報道されるべきだと思いますね。

それと、さつき地元の政治家の情報を——と申しあげたことに関連して、最近選挙の投票率がほとんど下がってきていますでしょう。これは、自分で政治に参加しているという意識がなく、ただ眺めているだけになっている。つまり有権者と政治家との意識の距離をちぢめることが必要です。それには自分達が選んだ人の動向がわかって、ちゃんと判断できる材料が必要で、民主主義の危機といえます。

三木 政治を動かす大きな要素は、マスコミだと思っています。政治的議論の場といえます。その場を提供して政治空間をつくっていくことが、特に活字メディアとして要請される。そうでないと、新聞が生き残れない。

浅井 そうですね。テレビが非常に影響力が強いということは、スピードの勝負で活字はかきません。だけどテレビではどうしても報道できないことがある。目に見える部分——つまり映像として流すことはできても、その背後にあるものは、ウラで何があったかということは映像にならない。口で説明するか活字で説明するしかない。

三木 見えない政治ですね。

浅井 日本の政治でも国際政治でも、常に表と裏があるのですよ。或は公然と非公然、立て前と本音とか。表の部分はテレビが映像化できるが、裏の部分をカバーするのが新聞の役割だと思います。

ところが私が拝見しますかぎりには、新聞もスピードを要するので、テレビと競争することにエネルギーをつぎ

こんでいるようなことが、度々見えますが。

三木 ありますね、たしかに。紙面のワイド化とか、カラー化とか、今だにあります。政治だけでなく一般の社会ニュースや経済ニュース、地方政治の問題にしても、ビジュアルでないとこで起っていることとか、関係づけをやらねば、存在理由がないと思います。

加藤春一さんが、日本の新聞には歴史がないと言われる。その時々報道だけで、そこへ来るタテの軸がない。外国と比べてよくこのことがわかると言われている。

浅井 たしかにそうですね。世界の動きにしても、例えばソ連崩壊や旧ユーゴスラビアのことなども、中東問題にしても数百年の歴史をふまえての現状で、そのタテ軸（時間軸）に立って、国際関係や地域というヨコ軸を重ねて考えねばならない。日本国内についても、税制改革問題と朝鮮半島問題とでもそうですね。税制改革はアメリカを意識して考える。朝鮮問題もそうですね。要するに外国との動きの関連で日本の政治を見るといこうと。視野を広げねばということですね。

三木 そうですね。今、地域のことを伝えるにしても、タテ軸とヨコ軸を重ねて、深い情報にしないで……。

### ★神戸を知的産業の生産基地に

浅井 そういう意味で、長い歴史から見ると、神戸の経済はどうなんですか。世の中が大きく変わつつあるのに、守りの姿勢のようなものが見えますが……。

三木 ぼくはずっと神戸で育ったままなので、比較論というのがあまり出来ません。他の都市を良く知らないからなんです。神戸は表面的にはずい分変わってきたと思っています。新しいものを採り入れる風風がある町だからでしょうが。変ったといえは港ですね。かつては物と一緒に人が出入りしました。アインシュタイン・チャップリン・孫文なども来ましたが、国内からも有名な人が出ていった。でも今はコンテナで物が出入りし、人は空港へ行くようになった。だから以前は、色んな情報発信



が神戸からなされていたのですが、そのあと造船や鉄鋼基地になり物中心になってしまった。いわゆる知的産業の生産基地ではないのです。

映画監督の大森一樹さんが、神戸六甲アイランドに撮影所を造って、世界中から有名な監督や俳優を呼びたいと話されたことがあります。これは面白いと思ったのですが実現されませんでした。ぼくは今でも映像産業をやったという希朝を持っていますけれど……。

浅井 そういう知的産業の育成ということは、ここで生みだし、ここから発信するということですね。関西から如何に新しい情報発信をするかについて、本当に長い間話し合われてきています。私は現在は発信する機械というかハードな面は金があれば出来るが、何を発信するかというソフト面が、いちばん問題だと思います。

三木 人が集まらないとできませんよ。まず発信源の人を集めねばね。だから優秀な撮影所を作るとかね。

今度、播磨公園都市に大規模放射光施設ができるのです。先端的な場ですから、多くの優秀な科学者達が集まってくるのです。これは期待できそうですよ。

浅井 関西空港に新しく記者クラブができるそうですが、そうすると外国から来る政治家や著名人などのインタビュールができる。そして関西から全国へ新しい情報が発信されることになる。

例えば、神戸でファッションイベントを開き、イタリアやフランスから有名なデザイナー達が来るというのと、勿論神戸からの情報が全国へ発信される。ところが帰ってしまおうとそれだけで終わる。これでは本当の情報発信なのかどうかと思うのですよ。

三木 イベントだけではね。

浅井 この場合も、神戸が常に持っている知的財産があればいいのですが、よそから持ってきたもので、その時ばかりの情報だけとはねえ。

三木 イベントに次ぐイベントだけで、神戸で何か生産しているということではないんですね。

今、神戸市長がシンフォニーホールを作るというプランを持っています。三つの案があって、一つは自前のオーケストラを持つ。二つめはフェスティバルのように世界のオーケストラを呼ぶ。そして三つ目が、現代音楽専門の設備を完備したホールでの演奏ということです。そして演奏曲はCD化して、色んな人に利用させるといふ。だから現代音楽の情報発信地という案です。

浅井 そういう文化的なものが、人々の身近にあることが大事ですね。ヨーロッパでは駅のすぐ近くに美術館や音楽ホールがあって、気軽に行けるようになっていいます。そしてワシントンなど素晴らしい美術館がたくさんあるのですが、それが全部無料なんです。誰でも見れる。いつでも行ける。日本は料金とって、それも高いですね。庶民のものになっていないような気がする。

三木 音楽会や演劇にしても、料金は高いですよ。外国の場合はどうして経営しているのでしょうか。

浅井 大金持ちが集めてきて、世の中へ還元するという形ですね。そんな発想が日本にない。

三木 昔は神戸でも池永さんという人が南蛮美術を集めたり、松方幸次郎さんも世界の美術を集めて美術館を造ろうとして……この方はできなかったのですが。今はそういう寄附行為的なことが、なかなかしにくいような仕組みになっているようですが。

浅井 お金がないわけではないのですが、美術品を買っても自分のものにしてしまっ、なかなか世の中へ還元する発想がない。その点、新聞社は美術展を主催して貢献している……(笑)。でも、しっかりお金をいただいている(笑)。美術展だけでなく恐龍展をやってもうけている(笑)。でもこれも動物や自然界への関心を……という点で役立っている。

### ★神戸に知的産業の集積地を！

浅井 今、神戸新聞の発行部数というのは？

三木 朝刊で53万部です。明治31年の創刊で、当初から

全国紙として出発したのです。その前は又新日報という歴史があります。うちは、地方紙ですから地域版をたくさん作っているのですよ。

浅井 東京に行って働いている人は、地元のことを知りたいと思いますが、東京のメディアは関西のことをのせませんよね。なにか雑誌でもいい東京で見れる関西の情報が必要ですね。

三木 昨年、東京にいる外国の記者を集めてシンポジウムを開いたのです。関西のニュースをもっと出すようにという話を出したのですが、なかなかむつかしそうです。

浅井 ジャパンタイムスには、三宮のレストランの地図など出ていますよ。神戸の外国系会社の求人広告も出てますよ。日本の新聞を作る側の意識を変えねば。えんえんと東京一局主義というのではねえ。

三木 明治以来というか、中央政庁が変わらないかぎりなんにもかわらない(笑)。

浅井 地方が大きな権限を持って、自分の責任において政策を施行できるようになれば、新聞の責任も住民をどういうふうを意識改革していくかという大事な役目を持つことになる。失敗したら自分の責任になりますから。

三木 先程、新聞が政治的な議論の場とならねば……という問題ですが。

浅井 たとえば県政・市政について、住民の政治に対する関心を、もっと今まで以上に身近に持つてもらうようにすることですね。

三木 神戸市長は面白い考えを持っているのですよ。今、地下を如何に利用するかという。工学関係の出ですから着想も情熱も人一倍で。こんな問題について市民参加の公開議論をやったらよいと思いますね。市民が全部参加できるような。地下利用のソフト面なども広ぐね。

浅井 神戸港沖の空港問題などは？

三木 神戸新聞社は促進派です。ただ淡路島の騒音問題もあるし、報道としては反対意見も紙面に出しています。社説も客観的に問題提起あたりまではしています。

浅井 賛成・反対かならずあると思いますが、長期的に見なくてはね。

三木 浅井先生が先程おっしゃったように、タテ軸という、未来へのばすという考えでないかと。

浅井 もう一つお伺いしたいことは、地方選挙についての新聞の大きな役割ですね。基本的な姿勢というものをお持ちでいらっしゃいますか。

三木 公平が第一です。法的にも規制があると思う。

浅井 報道と社説とは違うように扱っても、と。将来のビジョンから検討して、こんな人を推すとか。

三木 いえ。社説でもしていません。

浅井 論説委員長の立場からご覧になっていて、神戸という町のいちばん深い問題というのは何か。

三木 知的産業の集積地が必要だということですね。今ファッション関係はかなり集積できているのではという感じですが。それと芸工大ができたことなども。神戸でいちばん欠けているのは音楽性だとも言われています。

神戸の先入感的なイメージは、青空と海と明るさなどと言われますが、惜しいかな知的刺激がないことでもあるのです。以前は人々が集まって話合う場があったのですが、そういうタマリ場がなくなってきた。色んな分野の人が集まってアイデアや議論や夢を語り合うのです。それが少なくなりました。

浅井 新聞記者も、みんなサラリーマンになってしまったのでしょうか。

三木 だから播磨科学都市ができて、そこに学者や家族も住むことになるかと思っています。そしてそこにタマリ場ができて、素晴らしいホストとかホステスがいて、話の輪が広がっていけば……。

浅井 賛成ですね。どうも私も昔記者だったものですから、最後は飲む話になってしまつて……(笑)。





□れんさいエッセイ

## 《午後の出会い》⑦

# 六甲時代(三)

—つながる

丸本 明子〈詩人〉

絵／中西 勝〈画家〉

六甲連峰の、美しい、優しい山立がある。

山には、日々、異なる相貌がある。

宇宙を覗き込めるような、どこまでも澄んでいる青い空の日。浮雲が空を走って、風の囁き声の聞える日。霧が湧いて、山全体を被ってしまう日。雨が叩き付ける、嵐の日。山は魂を宿しているようだ。

私達は、戦中戦後の、白昼夢のような錯綜とした道を共に歩いて来た。今昔の感のつながる重い軌跡の時間の中に佇む。

詩誌「輪の会」の、例会が、或る、夏日の夕。

いつも世話になっている店で開催された。詩誌「輪の会」を主催されている、伊勢田史郎氏。雑務を引き受けてくださっている、岡見裕輔氏。校正の仕事をしてくださっている、各務豊和氏。温かい配慮をしてくださる、直原弘道氏。東京から駆け付けられた、倉田茂氏。例会の時、細々と気配りをされる、坪谷令子氏。大学を退官された頃から、体調を崩されているが、例会には、必ず出席して、仲間の詩心に触れる、暖かい批評をされる、なかけんじ氏。の方々が出席された。都合が悪くて、欠席された、海尻巖氏、灰谷健次郎氏、

赤松徳治氏、渡辺信夫氏。例会の場で過去から、現在を貫徹する、鋭い観点の詩魂を共有する時間を持つ。

先般、亡くなられた、中村隆氏の後を、引き継いで、伊勢田史郎氏が、「輪の会」を、主催してくださっている。中村隆氏の詩精神を継承されて、美しい感性を内包される編集をされている。

北見哉也氏が早世され、中村隆氏が急逝され、桑島玄二氏も、この世を去られた。彼等の、烈烈の詩魂は、仲間の心の中で生きつづけている。

六甲在住の、なかけんじ氏と、当時、神戸外大へ通学しておられた、岡見裕輔氏のお二人のことに触れていきたいと思う。

店の真横の山側の道を、神戸方面に向かって、十分ほど歩いていくと、閑静な住宅街がある。今もその、美しい住宅街に住まれている。時々、訪問させていだいた思い出がある。

なかけんじ氏の、鋭意な詩精神は、戦中戦後の時間、その時の、若い命の魂の、痛烈な鎮魂の詩魂を深く心に沈められて表象される。死者と、生者の魂の癒されることのない痛恨がある。

詩集「黄色の眼」一九五四年刊、「からす料理」

一九六五年刊、「『観光』神戸」一九七四年刊、  
「悪い収穫」一九七九年刊、「たまむし色の」一九  
八五年刊、「みるべきほどのこと」一九九三年刊  
がある。

詩集「みるべきほどのこと」の中から、

水子供養

.....

百萬世界萬物の靈

周囲をうめる

赤と青の風ぐるま

低く地面につきさされ

斜面から

吹きあがる突風

いっせいに

カラカラと音をたてて

日暮れ

だれもない

悲痛の時間が凝縮されている。

神戸外大の学生の方々が店に立ち寄られた。熱  
気に満ちた、文学論を戦わしておられた。その中  
に、岡見裕輔氏がおられた。眩しいほどの若さの  
活気にあふれている、文学論の徒に、羨望の念を  
感じていた。

彼には、詩集「サラリイマン」一九七二年刊、  
「続・サラリイマン」一九七九年刊、「サラリイマ  
ン・定年前後」一九九〇年刊がある。

詩集「サラリイマン・定年前後」の中から

何処へ

.....

朝のプラットフォームには  
見覚えのある顔がいっぱい

昨日と同じように

電車がすべりこんでくるのを

待ちながら

昨日と同じように

なにも待つてはいない

確実に電車がやってくる

確実にのりこんだところで

ドアが自動的に閉まる

ひとりひとりの家路が

自動的に断ち切られる

見覚えのある顔が

一瞬

痛みにゆがんだ表情を

うかべる

断ち切られる個の情況の表出に、鋭い批評があ  
る。

絵画のグループ「ラパン」の、黒田隆氏は六甲  
山麓に住んでおられ、神戸大学へ通学しておられ  
た。店に客が立て込んでくると、手伝ってくださ  
った。神戸大学卒業後、神戸商船大学の教授にな  
られた。同じ、「ラパン」の、西山茂氏は、よち  
よち歩きの息子の子守りを気長に、やさしくして  
くださった。今昔の感のつながる、温かい思い出  
に包まれる。





1994 JCI WORLD CONGRESS  
THE GOLDEN ANNIVERSARY OF JCI  
JCI世界会議神戸大会  
1994年11月10日～20日

● JCI世界会議神戸大会を成功させよう！

## 神戸に來られた方へ

## 心からのおもてなしを

清水 一彦

△神戸JCI副理事長・世界会議副実行委員長▽

11月10日から20日まで、JCI（国際青年会議所）世界会議が開催される。世界中の会員が一堂に会する世界会議は、重要な内外の国際交流の場として注目を集めている。神戸での開催は国内で5番

目、創立50周年の記念大会となり「神戸のもつ可能性」を無限に探ることの出来る最高のチャンス。

「JCI世界会議神戸大会を成功させよう」第6回目は、神戸JCI副理事長の清水一彦さんにお話を伺った。

——世界会議に向けて、清水さんは具体的にどのような仕事をなさっているのですか。

簡単に言いますと、メンバーサポート、メンバーコミュニケーション、そして、神戸に來られた方のおもてなしということになりますね。

通常は、例会・会員研修・会員交流・新入会員のオリエンテーションなど、会員向けの仕事をしておりますが、世界会議にともない現在は、会員室とコミュニケーション室の2本立てです。

世界会議には、多くの国から多くの人々が神戸を訪れます。すべての方の心に神戸という街が印象深く残るよう、我々も心からのおもてなしをし「神戸ホスピタリティ」を発揮できる努力をしたいと思っております。

そのひとつとして、

ナイトマップ（観光案内書）を制作いたしました。昼間食事の出来る場所も含めた約200軒のお店に協力していただき、神戸を責任持って紹介出来る小冊子に仕上がっています。

また、会期中には、三宮に2か所程のナイトインフォメーションブースを設置する予定です。そこへ行けば様々な情報を知る事が可能です。

昼間はスケジュールがぎっしりなので、神戸の街を歩き、観光することはなかなか難しいと思います。その分、どうしても夜の神戸が重要なポイントになってくるのではないかと予想し、工夫をこらしております。

——神戸JCI・拡大オリエンテーション特別委員会のご担当でもあるんですね。

こちらの方では、先日の8月1日・2日に神戸JCIカップ国際ジュニアサッカー友好大会を行いました。この大会は今年で2回目になります。海外から2チーム、国内から4チームの計6チームが参加し、磯上グラウンドで実施されました。昨年同様、競技だけではなく子供たちの中に新しい出会いと、友情、思いやりの心が生まれることを期待し、ホームステイ、イベント（ゲームなど）、パーティ、市内観光等、アトラクション



「夜の店ならお任せ下さい」と清水さん。

の内容も充実しています。11月の世界会議直前に、この大会が開催されることによって、神戸市民の方々が、またなによりも子供たちが国際感覚を磨くことが出来る絶好の機会だったと思います。

一緒に笑って、一緒に泣いて悔しがり、感動をすぐに分かちあえる子供たちの感性はすごいと感じます。私たち大人もそうでありたいですね。

——その他、例会のお知らせなどはございますか。

世界会議神戸大会を記念し、また、神戸青年会議所の活動と世界会議開催に対し市民の皆様へのご理解を深めていただくために公開例会を開催させていただく運びとなっております。日時は、9月26日(月)で18時30分より開会。場所は神戸オリエンタルホテル・紫陽花の間です。今回の講師として、元日本ギニア大使館の一等書記官、現在(社)ギニア友好協会広報官であり、テレビ、雑誌等で活躍されているオスマン・サンコン氏をお招きし、「HOW TO 国際交流——私の国際交流——」と題して講演いただきます。

サンコン氏が全く日本語を話せずに来日され、現在のようにたくさんの方の友人をつくり、ご活躍されるまでの苦労話と、個人レベルでの国際交流はどうすべきかを楽し

くお話いただく予定です。

世界会議において、メンバーばかりでなく市民の皆様にも積極的にご参加いただき、一人でも多く外国の友人をつくっていただきたいと考え、企画されたものです。

どうぞ奮って、ご参加下さい。

——世界会議の開催は決してJCMメンバーの為だけに行われるものではないということですね。

JCMの目的がまちづくり、人づくりであることは言うまでもありません。

関西新空港オーブン後、初の大型コンベンションとして開催する世界会議は、海外から10カ国5千人、国内より1万5千人がここに神戸に集まります。神戸という街の特性、機能を多面的に紹介し、世界に向けて主張や提言を行える場が開かれるわけです。

各種行事を通じて国際交流を深め、人種の違いを超えた人間同士のコミュニケーションを求め、真の心の交流による、いわば民間外交を進められる機会です。

神戸に来られたメンバーの皆様そして、市民の方々に、すばらしい出会いと思い出の場を演出するべく、現在奮闘中です。

この開催を通じ、地域から一層期待される団体として認められるよう努力し、未来に向けてどのような形でJCMらしく地域に貢献し

ていくのか、その方向性を確かめていきたいと思っております。

●市民が参加できるプログラム

★郷土芸能祭

11月12日(土)

★神戸国際会議場

★日本伝統文化展

「茶と日本の心の祭典」

「和敬清寂」

11月13日(日) 10時～17時

ポートピアホテル本館地下

★ふれあいの祭典<sup>※4</sup>

大茶会・いけばな展

11月13日(日) 13時30分～16時

兵庫県会館 生田神社会館

大丸神戸店

★水源地を訪ねて 健康ウォーク

11月13日(日) 9時～11時30分

布引公園付近

★神戸全日本女子20K

ロードレース

11月13日(日) 8時30分～14時

ポートアイランド内

★フォーラム イン 神戸

(環境フォーラム)

11月13日(日) 13時～17時

国際会議場メインホール

★フォーラム イン 神戸

(コミュニケーションフォーラム)

11月17日(木) 13時～17時

国際会議場メインホール

★グローバルコミュニケーション

コンサート「サルサナイト」

11月18日(金) 19時～21時

ワールド記念ホール

■お問い合わせは

JCI世界会議事務局まで

☎078-(242) 7739





## ■国際化の推進

# 世界の人々とともに生きる 共生社会をめざして

## — 地域国際化推進基本指針

「お話を伺ったひと

やまだ

かずしげ

山田

一成さん（兵庫県知事公室国際交流課長）

関西国際空港の開港を目前に控え、関西はいま、新たな国際化の時代を迎えています。

折しも兵庫県では、明石海峡大橋などのビッグプロジェクトを基軸に「交流と共生」の舞台づくりを進めていますが、真に世界に開かれた兵庫を実現するためには、外国人との交流を実践していく際の心構えも大切です。

そこで県では、今年三月、「地域国際化推進基本指針」を策定。世界の人々とともに生きるため、いかに外国人と交流し、共生の心を育んでいくかについての今後の方向性を示しました。

「この指針の特徴の一つは、『外国人県民』という言葉を使っている点です。平成五年十二月現在で、県内の外国人登録者数は約九万九千人。異なった文化を持ちながら県内に住んでいるこのような方々も県民として、日本人の県民と同じように、住みやすく活動しやすい環境を整備していくことを目的にこの指針を策定しました」と山田さん。指針の策定にあたっては、全庁的な意見交換に加え、外国人を含む有識者や外国人団体にも意見を聴いてまとめたとのことでした。

さらに山田さんは続けます。「日本に在留する外国人

は年々増加しており、保健・医療、労働、教育などさまざまな分野での課題が生じています。この指針では、これらの課題を解決するため、一人ひとりの県民レベルでの「こころの国際化」を推進することも大きな目的としています」

県ではこの指針の推進を図る具体的な施策として、今年四月、外国人県民インフォメーションセンターを開設。さまざまな相談や情報提供にあたっています。また、こころの国際化啓発事業として、地域ごとにセミナーやフォーラムを開催。九月二十九日には、尼崎市内で全県フォーラムが実施されます。一般県民を主な参加対象とするこのフォーラムでは、アグネス・チャンさんの基調講演やパネルディスカッションなどが行われます。

山田さんのお話のとおり、異なる文化、生活習慣、価値観を理解し、互いの人権を尊重し合える本当の意味での国際化は、それぞれの心の中にあるのではないでしょう。もう一度、自分の心に問いかけてみてください。

■お問い合わせ 兵庫県知事公室国際交流課

☎〇七八一—三六二—三〇二七

君たちも  
私がお茶漬けを  
食べようよ外国人の

# まずこころ 国際化





# ロココに華ひらく カサノヴァの恋



小池修一郎  
＜宝塚歌劇団・演出家＞



紫苑 ゆう  
＜宝塚歌劇団・星組＞



白城あやか  
＜宝塚歌劇団・星組＞

猛暑の続く今年の夏。宝塚大劇場では、星組のトップスター紫苑ゆうさんのサヨナラ公演「カサノバ、夢のかたみ」と「ラ・カンタータ」が上演されています。稽古中に作・演出の小池修一郎さん、カサノバを演じる紫苑ゆうさん、ボンパドール夫人役の白城あやかさんにお話を伺いました。

## ■つづれ織のような作品に

小池 僕は主役の人の衣装の立ち姿から役を決めることが多いんですが、紫苑さんは前にフロックコートを着てもらったし、長い芸歴の中で軍服もよく着ているのでロココの時代を選びました。カサノバというのは、その時代のひとつのシンボリックな存在だと思っています。スケールの大きな冒険家としていろんな所を回ったカサノバが自分を捧げるに足りる女性是谁かなと考えると、ボンパドール夫人との話がおもしろかったんです。政治を動かしていたボンパド



ール夫人が相手であれば、単に恋して悩んだというだけでないスケールの大きな話になります。紫苑 ボンパドール夫人だけを思う辺りはフェルゼンのですね。最初のイメージでは洋物光源氏かなとも思いましたが、あやか（白城）とのカップルの持ち味が生かされているので嬉しいです。初めて本当の恋をした相手がボンパドール夫人だったという設定は、彼女が世界を相手にしているすごい女性だけに自分自身も大きくなるんですよ。三角関係とかだけでなく、対世界という視野で自分を張って生きている人を理解して、その人にそっちを選ばしてあげる。そのことによって、カサノバがよりスケールの大きな人間に見えるればいいなと思います。白城 ボンパドール夫人は、普通の女性からルイ15世の寵姫になって20年余り、本当にその人のために尽くし続けたすごく魅力的な

女性なので、出てきただけで納得していただける雰囲気はどう出するか悩んでいます。ルイ15世と知り合う前に出合ったカサノバに、寵姫になって再会してあの頃の思いが甦ったという設定で演じます。ボン・パヴール夫人は、きつと政治のことで頭がいっぱいで、精神的にゆとりがない状態だったと思うんです。そういう時に自分がまだ普通の女性だった頃に思いを寄せた人が現われて心の揺らぎが出たんでしょうね。

小池 張りのある生活をしている華やかさ。それも女優とかの職業的なものではなくて天性の華やかさであって欲しい。これまでのあやかとは、割にスツとした役が多かったけれども、今回は表にバンバン出して欲しい。僕自身久しぶりの時代もので、少々クサイかなという言い回しがあるけれど、シメ（紫苑）のエロキューションとかクセとかをイメージしながら作ったつもりで、実際に稽古場で台詞として聞くと自分のテンション

で、ボンとそこまで持っていくってハマってくれるから予想以上のものになっていてやっぱりスゴいなと思っています。

紫苑 様式美は任せてください。

思い込んだら激しいですよ（笑）。

小池 カサノバも自分でワァワァいう役ではないから、振幅のない人がやるとすごく平板なものになってしまうんだよね。

白城 2人で芝居をしていて、私も引き込まれていってしまうことが多々あるんです。





小池 シメとやっている作品が自然にファンタジーの世界になるんだよね。いろんなキャラクターが浮き出てきて、つづれ織のように色がうまく混ざって一つの美しい織物になっていく。それはやっぱりシメのカラーでしょうね。

紫苑 自分の求めているものと先生が求めているものが同じなんですね。耽美的であったり、神秘的であったり。私はクラシックペーシスだし、何かフワツとした人間でないものを演じたいという気持ちが強かったんですが、そういう作品は少ないですし。

小池 「着いくちづけ」アポロンの迷宮」ではシメがその辺りをすごく膨ませてくれたし、一歩間違えうと変なノリの珍腐なものになるところをシメだからうまくクリアして、大人の鑑賞に耐えうるものにしてくれた。今回は最後の作品だから、非人間的なものにはしないけれども、シメが持っている明るい方のカラーをうまく出せればと思っています。カサノバには明るさや華やかさは欠かせないし、逆にイタリア人だけでも暑苦しいタイプではない。ラテン系の洗練された人間像で演じてもらえた。

#### ■全ての魂を傾けた舞台を

白城 私の舞台経験で芝居はほとんどシメさんと組んでやってい



レストランカラベルで。白城・紫苑・小池（左より）

るんです。ああして欲しいという事で欲しいという事を一切言わずに育てていただいて、言われた方が良かったかもしれないですが、私自身は本当に自由にさせていたことを感謝しています。

小池 自由にさせたから、あやかの感じる力がついたんだよ。シメがこう出るというのをうまく察知して芝居をしている。

紫苑 最初から決めたんです。未完の神器だから大らかに育てよう。それに私も言うタイプではないし、感性人間で絶対毎日芝居が決まらないから。その時の状況でやってお客さんが感動するものだから決めるもんじゃないし。それについてきてくれる相手役だったから嬉しかったです。すごく大きくなってくれたし。

白城 シメさんのおかげで、本当

に芝居が好きになったんです。

紫苑 一つでも自分に似合った役を演じることが役者としては嬉しいことで、ドイツのルードヴィヒ、ウィーンのルドルフと私の好きな人間を演じてきて、最後に大好きなヴェニスで舞台にしたコスチュームもので、宝塚らしい作品であることが嬉しいです。最初のゴンドラの場面も、自分の頭の中には景色が浮かんでいるし、こういう雰囲気は私には好きなんだという感性が劇場の空気にプラスされて伝わればいいなと思います。

小池 ずっとシメを見てきた人にも、どこかにこういうシメもいたんだと感じていただきたいね。

白城 私が出来る精一杯のことを舞台でお返ししたいと思います。

紫苑 宝塚が本当に好きでこまめとやってきて、改めて自分の良さはここにしかないし、この舞台で男役で演技をするのが自分なんだと実感しています。舞台人は精神的、肉体的コントロールが一番大事なんです。大劇場から東京公演の楽日まで5カ月余りの長丁場ですが、一日でも一瞬でも満足しない舞台がないように全ての魂を傾けたい。退めてから芸能活動をする気もないので真心を込めてすべての芝居、歌、ダンスをやりたいと思っています。

(レストランカラベル 構成・瀬川)



▲紫苑ゆう

舞台は18世紀の中頃、ヴェネチア共和国。20歳のカサノヴァ（紫苑ゆう）は祭に訪れたフランス娘ジャン

●星組大劇場公演  
トップスター、紫苑ゆうのサヨナラ公演は「カサノヴァ・夢のかたみ」は18世紀、ロココ時代随一の恋の冒険家であるカサノヴァとロココの女王と謳われたルイ15世の寵姫ボンパドゥール侯爵夫人の間のあり得なかった恋を描くオペラロマネスクです。

## STAGE

## MESSAGE from TAKARAZUKA



ヌ・ボワゾン（白城あやか）に一目惚れする。ジャンヌを連れ出そうとするが嫉妬した女優の密告で逮捕、投獄されるが脱獄に成功ヴェネチアを出る。

数年後、放浪の旅を続けるカサノヴァは謎めいたサ

▲白城あやか



ンジェルマンと名乗る伯爵（麻路さき）と出会い共にパリに入り、オペラ座の仮装舞踏会でジャンヌに再会する。フランス内政だけでなく、ヨーロッパ外交をも

ボンパドゥール侯爵夫人となつたジャンヌへの思慕を遂げようとするカサノヴァは、知らず知らず彼女を取り巻く国際的な陰謀の渦に巻き込まれていく。

宝塚ならではの華麗なコスチュームブレイが繰り広げられます。

そしてもう一本はロマンチックレビュ「ラ・カンタータ」。宝塚レビュの伝統を受け継ぐ豪華なシーンがいっぱい。

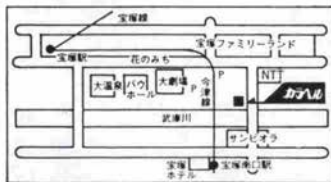
紫苑ゆう、大劇場最後の舞台に彼女の男役の実学がふれます。

★「カサノヴァ・夢のかたみ」作・演出 小池修一郎。「ラ・カンタータ」作・演出 岡田敬二  
8/12（9）26 S67000円  
A47000円 B30000円  
新人公演 8月30日

## 宝塚歌劇 座席券セットのホテル

### 宝塚レディースイン

●ご宿泊（朝食付） お一様 ¥5,700  
<税別> 全室バス・TV付



阪急宝塚南口駅、徒歩3分・阪急宝塚駅、徒歩5分  
〒665 宝塚市武庫川町47-1 ☎0797(81)0001

## NEWS

●友の会へのお誘い  
素敵な夢を贈り続ける宝塚の舞台。そのレディドリマーの世界への架け橋、宝塚友の会にあなたも入りませんか。

A会員／一年 七千二百円で毎月「歌劇」を郵送。

B会員／一年 七千二百円で毎月「宝塚グラフ」を郵送。

普通会員／一年 二千三百円で毎月「宝塚だより」を郵送。

その他、友の会行事への参加、座席予約などの特典もあります。

花の道にある友の会には宝塚の情報がいっぱい。気軽にお寄り下さい。

ご入会のお問合わせは宝塚友の会 〒665宝塚市栄町1の1の57 ☎0797(85)6801まで。



# 邦舞リサイタル

井敷  
天機

この夏の邦舞から秋に話題の  
三人の邦舞家が挑む

8月27日(土)  
花柳芳一が挑む  
マクベス夫人



花柳芳一さん

円熟の女流邦舞家・花柳芳一さんが、久々に三ツ桜会特別公演(神戸市芸術文化活動助成対象事業平成6年度くすのきステージ)を、8月27日(土)午後三時開演/県民小劇場(☎078-362-3846/¥5,000)で開催する。

プログラムは、創作舞踊「港」と、シェークスピア原作「マクベス」より、一人芝居「化性の森」幕辺夫人を演じる。

特にマクベス夫人は、芳一さんが、かねてより一人芝居として構想を暖ためてきた作品で、作/駒井義之、演出/夏目俊二、美術/板坂晋治、作曲/神代初美、指導/鶴澤友治、照明/柳原常夫らのスタッフと、コロスに、花柳勢喜寧、花柳宗信、花柳紗弥晶、花柳広重、藤間瑛文、藤間史晃さんら若手女流舞踊家をオーディションで選り指導して共演するのも話題。

9月24日(土)  
若柳吉金吾が  
「かさね」の哀れを

神戸国際会館大ホールでのリサイタル連続十年をめざしてきた若柳吉金吾さんが、第八回目を9月24日(土)午後三時開演(¥7,000)で開催。「いよいよ正念場に立ったという思いがいたします。心をひきしめて一つ一つ丁寧に完成させたい」とこの持続力は凄い。(☎341-6832)

三作品の一つは清元「保名」で恋に狂う男の姿を。創作素踊りを得意とする吉金吾さんの今回の出し物は、大和楽の「風流洛中洛外」。今年、遷都千二百年を祝う京都の歴史にあやかり、平安、室町、江戸と時代の流れる中での京の風物を軽妙に。とりは、与右衛門に尾上流家元菊之丞をゲストに清元「かさね」を踊る。封建社会の中で懸命に生きる男女の悲劇。恋の哀れをどう演じるかが見どころ。他に師の振付で志翠が「西鶴おんな」、吉一保と吉澎童が「女夫万才」を踊る。



若柳吉金吾さん

10月8日(土)  
娘道成寺を華やかに  
花柳小三郎が

第2回目のリサイタルを、10月8日(土)午後三時開演(¥5,000 ☎078-573-223/802-0030)神戸国際会館大ホールで開くのは花柳小三郎さん。

美しい女形として人気のある彼の演目は、大和楽の「あやめ」と、義大夫・長唄のかけあい道行から鐘入り迄を踊る「京鹿子娘道成寺」。



花柳小三郎さん

素踊りは、ぜひ踊ってみたいと義大夫「都十二月」を、花柳與師と(榎茂都扇生振付)披露する。師匠の花柳芳五三郎さんと、同門の五三輔さんが長唄「賤機帯」を。花柳芳次郎振付の大和楽「雪折竹」を花柳芳一さんが踊る。

大和楽は、大和左京・左幸連中義大夫は、豊竹咲大夫・鶴澤清介連中、長唄は、杵屋禄三、禄宣連中、鳴物、藤舎呂華泉連中、美術は三木次郎。

期待の若手舞踊家の華やかには舞台が楽しみである。

# KOBEシアター

## ギターリズム 植田健一さん

VOL.2

文／上野信二

〈劇団NIWATORIPロデューサー〉  
1966年宝塚市生まれ、大阪芸大在学中より  
「黒猫」「大阪ミッドナイトパティ」など脚  
本、演出（現在神戸新聞社勤務）

十年前、誰もがそのステージに立つことを夢見てやまなかったライブハウス「RITO」。私自身その今はなきライブハウスの鮮烈なまでの音の響きに憧れ、よく通いつめたものだ。「RITO」が残

っていたもの、それは私を含めた多くの若者達への想い出のリズム&ブルースと一人のギタリストの存在であった。

ギタリスト植田健一、東灘区出身の二十七歳。六歳よりピアノを始め十二歳で初めてエレキギターを手にする。十六歳の頃、当時全盛を誇っていたライブハウス「RITO」でレギュラーギタリストの座を射止める。以後十年來、京阪神を中心にライブ活動を展開。年間百本近いライブステージをこなす。また彼は曲作りにも定評があり、関西のミュージックシーン

に少なからず影響を与えている。そんな彼に神戸における彼自身の音楽観を聞いてみた。

「僕にとって音楽というのはスタイルじゃなくて、情景とか情感に結びついているもんなんです」と言う。たしかに彼の音楽をジャンルで区分すればロックポップスということになるかもしれないがスタイルのみにとらわれたくないという自由な音楽を目指す彼の考えの一端がここから伺える。したがって彼の音楽にはバックボーンと成り得るものが存在しないのである。

高校時代から今日に至るまで、ほとんど毎週のようにライブをこなしてきた彼だが、十年以上演奏してきてやっとわかったことがあるという。「ライブでお客さんをごちそうする、いかに説

得するかというのは二次的なものだと思うんです。下手じゃもちろん話にならない、ただ上手だけでも人の心には響かない。結局はパーソナリティだと思っんです。それが音そのものとあいまって人の心を動かすんじゃないかと……」

来月には久しぶりに神戸でのライブを予定している。神戸について「この街は東京や大阪とは全く違う音の響きがあるんです。街の空気そのものが透き通っているんですね。演奏しててやっぱり心が落ちつくし、自分自身の音を素直に表現できる感じがするんです」という。

今後もライブ活動はもちろんのこと、曲作りにも益々力を入れ、プロデューサー的な仕事もやりたいという植田さん。その目の輝きは、十六で初めてステージに立った時と今なら変わるものはない。



KENICHI  
UEDA